
上へ参ります

国仲 聡

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上へ参ります

【Nコード】

N6893J

【作者名】

国仲 聡

【あらすじ】

淡々と語るエレベーターガール。

僕が乗り込んだのはエレベーター？

二人の間で不思議な会話が織り成される。

僕はどこにいて何をしているのだろうか？

「上へ参ります」

僕好みのエレベーターガールが優しい笑顔でそう言う。掌が上を指す。

エレベーターの中には彼女しかない。僕はそこに乗り込んで奥まで行く。そして、彼女の後姿を見る。僕は彼女の着ている制服を見た。とても、センスがいい制服だ。それだけで僕のこのデパートに対する評価は高い。デパートなんて僕にとってはどうでもいい存在で大体同じような店舗が同じように並び、商品は定価で売られている。昔は百貨店と呼ばれ、色んなものが揃う夢の大型店舗だった。ただ、昨今の我が国 先進国はどこも似たようなものかもしれない。では物が溢れ、デパートは色んなものを揃えられなくなってきた。物理的に揃えるスピードが新しくものが生まれるスピードに追いつかないのである。そこへ来てインターネットの進化が更にデパートを脆弱させている。

エレベーターガールから話はそれるがもう少しだけ。

秦の始皇帝は兵馬俑に世界の全てを再現しようとした。でも、彼の知る世界は狭かった。アテネでは随分前にオリンピックが開催されているし、モーゼは十戒を振り回していた。でも、知らなければ彼の知る世界は彼の知る世界でしかない。

つまりはデパートもそう言うことだ。商品の世界が広がり過ぎてしまったのだ。

背が高く、手足が長く、ほっそりとしている。猫のような目で口が大きい。首が細く長い。膝が一度も地に着いたことのないようにつるりとしていて滑らかだ。

エレベーターのドアが閉まり、エレベーターには僕と彼女だけになった。再び彼女は「上へ参ります」と言う。

エレベーターは動かない。静寂がエレベーター内を支配する。彼女が僕の方をじっと見る。そして、「やっぱり上へは参りません」と言う。僕は呆氣にとられる。

「上へ参りたくありません」と彼女はきっぱりと言う。

僕は「何故？」と訊く。

「上へ参りたくなりませんでした。あなたを見ています」と

彼女は白いハイヒールの踵でフロアーをカツカツ三回鳴らす。

「もう止めた。丁寧な言葉を使うのは」

彼女は僕の方を鋭い視線で見る。僕は彼女の眼をじっと見返す。

そして、頭の中で色々と考えてみる。僕は、分からないなあ、と言う。

「さっぱり分からないなあ。本来、君は僕を上へ参らせるべきだよね？」

「そうかもしれない」

「じゃあ、上へ参らせて」

「嫌よ」と彼女はきっぱりと言う。「絶対に」と付け加える。

「何故？」

「さつきも言っただけ、あなたを見ていますと嫌になったの」

「何か僕が悪いことした？それとも僕が存在が気に入らないんだろっか？」

「あつたりいー」と彼女は「ピンポン」とでも言うように右手の人差し指を立てる。

僕はうんざりした顔をする。「じゃあ、どうすればいい？」

「何もしなくていいんじゃないかしら？私も何も望んでいないし。そもそもあなたはどこに行くつもり？」

「六階の書店」と僕は言う。

「そうなの？書店に何の用？」

「そんなこと答えなくちゃならないの？・・・まあ、いいや。じゃあ百歩譲って答えよう。特に用は無い。敢えて言うなら、何となくそこに言っ、何か自分の読みたくなるような本が無いかを見つ

けに行こうとしている」

「それは見つかるの？」と不思議そうな顔をしてエレベーターガールの彼女は訊く。

「それは分らない。それが見つかるかどうかはあくまでも結果なんだ。見つかるかもしれないし、見つからないかもしれない」

「ふーん」とつまらなさそうに彼女は言う。僕はそこそこの腹が立っていたが、「ふーん」と言った彼女の顔はぴったりと僕の好みに当てはまっている。そのことは僕をどうするべきなのか分からなくさせる。

「下へ参ります」と彼女は言う。

「ねえ、僕は上へ行きたいんだ。下には食品売場しかない」

「地下鉄に乗れるわ」

僕はやれやれと言った表情をする。

「地下鉄には乗らない。乗るつもりが無いし、理由が無い。．．．いい加減にしてくれないか」

「横へ参ります」と僕の言ったことなんか無視して彼女は言う。階数の表示されたボタンの下に付いている金属の蓋を開けその中のボタンの一つを押す。エレベーターは深夜の冷蔵庫のようにブーンと言う機械音を立てる。

「動いてるの？」と僕は訊く。

彼女は軽く頷いて、「遠心力を感じる？」と訊く。

僕は何かを確かめるように神経を研ぎ、何かを感じようとする。

そして、「少し感じる」と正直に答える。

「これじゃあ、不満？」

「かなり」

「じゃあ、やめた」と言っただけで彼女は再び蓋の中のボタンを押す。しばらく二人とも黙っている。

「誰もこのエレベーターを呼べないわよ」と僕が考えていたことを見透かすように言う。「そう言う類のものじゃないの、このエレベーターは。だから、あなたがこれで書店に行くことは不可能なの」

「これは普通のエレベーターではないってこと？」

エレベーターガールははっきりと頷く。

「過去に参ります」

彼女はボタンを押す。何も起こらない。

僕はしばらくして、「動いてるの？」と訊いてみる。そして、神経を研ぐ。何も感じない。

「動いてないわよ。でも、時間は戻ってるかもしれない」

「かもしれない？」

「そう。あなたの捉え方次第ね。そもそも、時間という概念自体がそう言うものよ。ただの無形の指標にしかすぎない。あなたがBに今いるとして、過去の地点Aがあつたとする。あなたがAに戻ると言うことはあなたはBを知らないことになる。そうね？」

僕はコクリと頷く。「うん」

「だから、あなたがAに戻る時AとBの間にある時間が消失してしまえば、あなたは過去に戻ったことになる。本当はBにいたはずなのにAにいる。そしてBとAの間で起こったことを記憶していない。過去に戻ると言う事実の虚偽性は誰にも証明できない」

彼女は帽子を取り、その下から綺麗な真つ直ぐとした黒髪が露わになる。彼女は左手の人差し指で帽子をくるくると回す。

「行く川の流れは絶えずして、しかもとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしない。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。 知ってる？」

「方丈記」と僕は言う。

「正解。それとね、ヘラクレイトスは『万物は流転する』って短い言葉でそのことを言っているわ。合理的ね。今、正しいことは明日、誤りかもしれない。時間でさえもね」

僕は彼女の言ったことを真剣に考えた。そのことで僕は自分がいつの間にか彼女のペースに嵌ってしまったことに気付く。僕はこの小さな箱の中で色々と考えていると色んなことが不安で虚しく

て陰鬱で無駄なことのよう思えてきた。僕の思考はこの小さな箱に閉じ込められたまま開放されることは無く、深い井戸の底に沈んでしまつて、光も無く、誰にも助けられることは無いのだ、と思つた。

気付くと彼女は楽しそうに笑っている。春のように爽やかで裏表の無い表情で。

「私が言つたようなことを真剣に考えたらきりが無いわ。とっても自家撞着的だけど気にしないで。あなたをいじめてみたくなつたの。私が言つたような思想つて世の中にはたくさん存在するものだわ。物事なんて裏を見れば、表との相関性が成立しなくなるもの。あなたはあなたの中にいるのよ」

僕はとにかく頷く。彼女の言っていることは直感的に分かるような気がしてしまう。

彼女はパンパンと手を二回叩いた。

「上へ参ります」と彼女は掌で上を指し、優しい笑顔で言う。エレベーターが動き出す。エレベーターの表示も「1」から「2」に変わる。確かに動いている。

「私たちはもしかすると、本来違う形で出会つていたかもしれないし、これから出会うのかもしれない。今あつたことは無くなつて、それ以前の過去に戻り、あなたがこのエレベーターに乗り込む。他には誰も乗っていない。そして、私はあなたを素直に六階まで乗せる。私はあなたが降りる時、私のお気に入りの小説のタイトルを言う。それをあなたは買う。そうなければきっとあなたは私に小説の感想を述べるだろうし、やがて仲良くなれるかもしれない。恋人になるかもしれない。そうなければいいと思う?」

僕はしばらく考えてから、「少しね」と言うと、彼女は親密な微笑みを浮かべた。

表示ランプの「8」が点灯しエレベーターのドアが開く。

「六階。書籍、文具、CDのフロアーです」と彼女はエレベーターガールらしい口調で言う。

僕は無言で彼女の横を通り過ぎエレベーターの外に出る。

「下へ参ります」と彼女は言う。エレベーターを待っていたであろう四人の男女がそこに僕と入れ替わりで乗り込む。

「扉を閉めます」と彼女は言う。僕は振り返る。そして、彼女は「また、会いましょう」と僕に言う。そして、扉は完全に閉まる。確実にエレベータは下に下りていつている。

僕は本を買う気にならなかった。そして、エレベーターには乗らずエスカレーターに乗って、下に下りる。

一階まで降りて、エレベーターの脇を通る時、彼女の声が聞こえる。僕はその声の方向を振り返らない。

「上へ参ります」と彼女の声が聞こえる。

その声は僕を何故かとても懐かしく感じさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893j/>

上へ参ります

2011年10月6日17時45分発行